Osaka University Knowledge Archive

Title	形容詞語幹の用法の研究 : 上代における修飾用法を中心として
Author(s)	林, 浩恵
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49100
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【31】

氏　　名	林（はやし）　浩恵（ひろえ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６９４　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**形容詞語幹の用法の研究――上代における修飾用法を中心として――**
論文審査委員	（主査） 教　授　蜂矢　真郷 （副査） 教　授　金水　　敏　　准教授　岡島　昭浩

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、上代・中古（九〇〇年代）における形容詞語幹の用法について、上代における修飾用法を中心として、語幹の用法の違例とされるものを合わせて、国語学的に検討するものである。

序章、第一章「語幹の用法とその違例」、第二章「形容詞語幹の連体修飾用法――違例を中心として――」、第三章「形容詞語幹による連体修飾と連体形による連体修飾」、第四章「形容詞語幹の副詞的用法」、終章からなり、末尾に「参考文献」等を示す（400 字詰換算約 465 枚）。第二章は、一節「上代における様相」、二節「上代のイカシの活用の種類」、三節「中古（九〇〇年代）における様相」からなり、第三章は、一節「上代における様相」、二節「中古（九〇〇年代）における様相」から、第四章も、一節「上代における様相」、二節「中古（九〇〇年代）における様相」からなる。

第一章は、形容詞語幹の用法について、従来の研究を見た上で、とりわけ、その違例とされるものをとり挙げ、ク活用形容詞の違例とシク活用形容詞の違例とを従来のように同列に扱うことはできないとして、前者の違例は連体修飾用法のみに見え、後者の違例はその他の用法も見えるという差があること、および、前者は一般例と違例との両者が見えるのに対して、後者は違例のみが見えるという差があることを指摘して、それにより、前者の違例は二次的形態であり、後者の違例は本来的形態であると述べる。

第二章は、形容詞語幹の連体修飾用法の、ク活用形容詞の違例とシク活用形容詞の違例とについて、ク活用形容詞が状態性意味に、シク活用形容詞が情意性意味に傾向するという形容詞の意味分類と合わせてとらえ、前者の違例の二音節以上のものは、シが感情・評価的意味を表す要素であると類推されて付加されたものであるなどと述べる。また、活用の種類に異論のあるイカシについて考察し、ク活用相当であると述べている。

第三章も、形容詞の意味分類と合わせてとらえていて、語幹による連体修飾と連体形による連体修飾との選択について検討し、状態性語幹では語幹による修飾、情意性語幹では連体形による修飾が選択される傾向があることなどについて述べる。

第四章は、形容詞語幹の副詞的用法について検討し、とりわけ、上代においてク活用形容詞語幹が単独でニを伴わないことについてその理由を追究し、ク活用形容詞語幹は連体修飾用法を中心的用法とし、情態副詞構成素は連用修飾用法を中心的用法とすることから、ク活用形容詞語幹が単独でニを伴わないと述べる。また、それが単独ではなくニを伴う場合についても、接頭語が副詞的意味を持つことや、名詞＋ク活用形容詞語素が形容詞句相当であることから、ニを伴うことが可能であると述べる。

論文審査の結果の要旨

形容詞語幹の用法については、橋本四郎氏などの研究がある。本論文は、それらを踏まえた上で、さらに詳細に研究を深めたものと言える。形容詞の意味分類については、石井文夫氏・山本俊英氏以降、橋本氏などの研究があり、本論文は、主に阪倉篤義氏の意味分類を利用して、それと語幹の用法との関係について考察している。語幹の用法と、意味分類とを相関させた研究は、これまでに全くなかった訳ではないが、本格的なものとしては初めてのものと言ってもよいと思われる。

形容詞語幹の用法の違例については、従来、ク活用形容詞の違例とシク活用形容詞の違例とを同列に扱うのが通常であり、中には前者の一般例や後者の一般例とともに四者を同列に扱う論もあった。本論文は、前者の違例は連体修飾用法のみに見え、後者の違例はその他の用法も見えるという差があり、また、前者は一般例と違例との両者が見えるのに対して、後者は違例のみが見えるという差があることを指摘して、前者の違例は二次的形態であり、後者の違例は本来的形態であるとしている。これは、従来の研究を改める重要な指摘であって、大きく評価されるものである。

また、上代においてク活用形容詞語幹が単独でニを伴わないと工藤力男氏が述べられることについて、その理由を、ニを伴う情態副詞構成素は連用修飾用法を中心的用法とし、ク活用形容詞語幹は連体修飾用法を中心的用法とすることによるとしている。工藤氏の述べられる事実について、その理由を考えることができたことも評価される。

さらに、シク活用形容詞語幹の用法の違例を持つ語の語素が、連体修飾用法に用いられるものと、ニを伴うものとについて考察し、それがク活用形容詞語幹と情態副詞構成素との間に位置づけられることを述べていて、語素から派生して形容詞と形容動詞とが成立する状況を追究するに当たり、今後の研究の発展の方向性を見せたと言える。

その他、形容詞語幹による連体修飾と連体形による連体修飾との差を明らかにしたことも注意される。また、上代において程度のみを表す形容詞がないと述べていて、阪倉氏の二種五類の意味分類より二種四類の意味分類が本来である可能性を示唆していることも注意してよいことである。

他方、「中古（九〇〇年代）の様相」については、この時期に変化が起きることが多いことからこうした節を設けたことはよく理解されるが、上代について述べる中に重要なことが多いのに比して、必ずしも明確な結果が出ているとは言えないところもある。その他、細部に問題のある点もある。しかしながら、従来の研究を改める重要な内容を含む本論文は十分に評価できるものである。中古の様相、ないし、上代から中古への変化については、申請者に別に上代・中古の形容詞に関する論があることと合わせて、今後の研究が期待されるところである。

なお、2008年2月6日、本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上のようであるので、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。